

自然体験活動指導者養成研修(NEAL コーディネーター)

1. 事業の概要

○ 事業の趣旨

自然体験活動事業を企画・運営・評価し、事業の安全管理を行うとともに、NEAL リーダーおよびインストラクターを統括し、事業全体をコーディネートする指導者を養成する。

○ 実施期間

令和元年12月2日(月)～令和元年12月6日(金) 4泊5日

○ 対象者・参加者数(人数/定員)

NEAL インストラクター資格を所持している方(もしくは資格申請中の方) (13名/20名程度)

○ 講師

青木 康太朗(國學院大學人間開発学部 子ども支援学科 准教授)

菊間 彰(一般社団法人をかしや 代表)

西胤 正弘(有限会社カヌースクール九州 代表)

井上 桂(下関市深坂自然の森 所長)

○ 活動プログラム

日程	12月2日(月)	12月3日(火)	12月4日(水)	12月5日(木)	12月6日(金)
8:00					
9:00					9:15～10:00 NEAL資格登録の手続きについて ふりかえり(成松 恵)
10:00		8:30～12:00 対象者理解① 3.5h (菊間 彰)	8:30～12:30 自然体験活動の安全管理 3h 自然体験活動の指導 1h (西胤 正弘)	9:00～12:00 自然体験活動の企画・運営 3h (井上 桂)	10:00～10:30 認定試験 0.5h (成松 恵)
11:00					10:30～ 閉講式・解散
12:00				12:00～13:30 昼食・休憩	
13:00	主任講師:全体進行(成松)	12:00～13:30 昼食・休憩	12:30～13:30 昼食・休憩		
14:00	開講式・ガイダンス 1h 14:00～15:10 (成松 恵)	13:30～14:30 対象者理解② 1h (菊間 彰)	13:30～15:30 自然体験活動の指導 2h (西胤 正弘)	13:30～16:30 自然体験活動の企画・運営 3h (井上 桂)	
15:00					
16:00	15:15～18:15 青少年教育における体験活動 1.5h 学校教育における体験活動 1.5h (青木 康太朗)	14:30～17:30 自然体験活動の特質 3h (菊間 彰)	休憩		
17:00			15:45～17:45 自然体験活動の企画・運営 2h (井上 桂)	休憩	
18:00		夕食・休憩		タベのつどい	
19:00	オリエンテーション 荷物移動・入浴・休憩	入浴	夕食・休憩	入浴	
20:00	19:30～21:00 情報交換会	自由交歓	19:00～20:00 自然体験活動の企画・運営 1h (井上 桂)	18:30～ 成果発表会	
21:00			入浴		
22:00	就寝	就寝	自由交歓		
			就寝		

2. 活動の様子

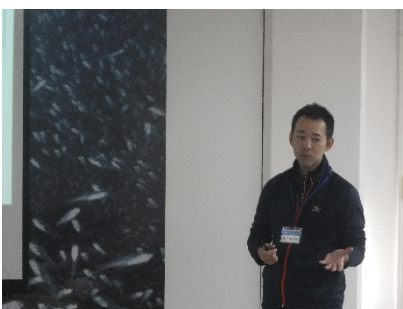
< 1 日目 >

1 日目は開講式の後、主任講師の成松事業推進係員より NEAL 制度の仕組み、NEAL コーディネーターの役割についてのガイダンスを行った。NEAL リーダー、NEAL インストラクターを修了した参加者が、制度についてどの程度理解しているかクイズ形式で確認を行った。その後、日本各地から参加した参加者の特性を活かしたアイスブレイクゲームを行うとともに、自己紹介シートを用いたワークショップを行い、参加者相互の理解を深めた。

ガイダンスの後、講師の青木氏による「青少年教育における体験活動」、「学校教育における体験活動」の講義が行われた。

「青少年教育における体験活動」では、青少年教育の定義を考えることから始まり、現代の子供の体験事情、体験活動がもたらす効果や現代の子供に必要な体験について講義が展開された。参加者は、幼児期の体験活動が非認知能力を高めること、体験を通じて生じる「なぜ」「どうして」を考え行動することが子供の成長の糧となること、体験活動の種類や頻度だけでなく「どのように体験させるか」が重要であることを学んでいた。

「学校教育における体験活動」では、学校教育における体験活動の位置づけ、小学校における集団宿泊活動の現状、学校教育における体験活動の今後の在り方等について講義が展開された。参加者は体験活動と学校教育が想像以上に近い距離にあり、普段子供達と接する先生達が体験活動にどのようなねらいを持ち、期待をしているかを学んだ。また新学習指導要領や中央教育審議会答申に明示された方針や教育の在り方等についても理解を深めた。



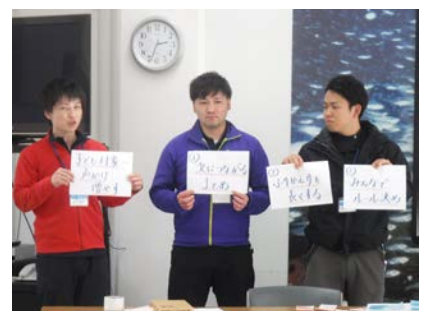
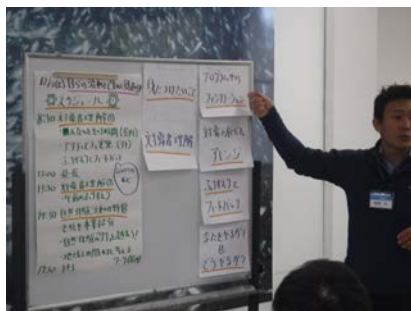
< 2 日目 >

2 日目は菊間氏による「対象者理解」、「自然体験活動の特質」の講義演習が午前午後に分けて行われた。

「対象者理解」では、まず初めに参加者がスキルとして習得しているアイスブレイクゲームを各々に実践させ、参加者同士の交流を深めるとともに、参加者の指導の様子や傾向を菊間氏が観察し

た。その後自然の家の屋外フィールドを全員で散策し、自然の家内の「すりばち広場」にて演習を行った。すりばち広場では、まず菊間氏によるアクティビティが実施された。葉を用いたオリジナルアクティビティで、広場内の「一番大きい葉」「一番小さい葉」「一番匂いの強い葉」「一番可愛い葉」等のお題が与えられ、グループ単位で制限時間内に採集する活動を行った。一つのお題毎に全員が集い、「葉っぱっぱ！」の掛け声で互いのグループの葉を見せ合い、全員で品評した。普段指導者である参加者が体験者となり、生き生きと笑顔で活動する様子が見られた。ふりかえりでは「やってみてどうだったか?」「何か感じることはあったか?」等を発表し、併せて他の参加者や菊間氏が意見を述べた。活動後は参加者自らがアクティビティを考案し、実践する演習を行った。3～4人1組の各グループに分かれ、同広場で可能な15分間のアクティビティを考案し、他の参加者へ実践した。各グループから、特色あるアクティビティが展開されたが、特に「森のお弁当」というアクティビティが非常に好評であった。各グループ発表の度に、「良かった点」「改善点」を付箋に書き出し、参加者から発表者へ渡した。また菊間氏からの講評では、「始まりの寸劇が非常に楽しかった」「説明の言葉が多すぎないか?」「説明が淡々とし過ぎて参加者がワクワクしないものになってないか?」「発表者3人それぞれの個性をもっと出しても良いのでは?」等の助言があった。参加者は普段自施設で評価される側となる機会が少ないこともあり、自身が気付いていなかった指導のクセ等、熱心にアドバイスを聞く様子が見られた。全グループ実施後に菊間氏から、「ねらい」を参加者に言わないこと、「何をやるか」ではなく「どうやるか」(テーマやねらいに合わせて)が肝心であること等が参加者に伝えられた。

その後の「自然体験活動の特質」では、地域と連携する方法についての講義が展開され、菊間氏が実際に今年度連携した今治市の企業との事業紹介が行われた。その後「地域と連携するには?」をテーマに各グループで分かれワークショップを実施した。演習のまとめとして、こちらの願いを地域や連携先に押し付けるのではなく、地域のニーズや課題を把握し、それに寄り添った提案を通じて連携することが求められることを、ワークショップを通じて参加者は学んでいた。



< 3日目 >

3日目は西胤氏による「自然体験活動の安全管理」「自然体験活動の指導」の講義と演習、また夕方から夜間にかけては井上氏による「自然体験活動の企画・運営」が行われた。

「自然体験活動の安全管理」では、個人の安全管理スキルではなく、コーディネーターとして求められる安全管理の体制作りと安全管理に関する関係法規および保険について講義が行われた。はじめに過去の事故事例を基に、「ハインリッヒ法則」や「スイスチーズモデル」から事故発生メカニズムを学び、「mシェルモデル」の理論を基にリスクアセスメントへの理解を深めた。その後は各グループで自組織での安全管理体制の課題を書き出すとともに、どのような対策が有効か考えるワークショップを行った。参加者は互いの施設の取組を情報交換し合い、積極的に学び合う様子が見られた。その後は日本の野外活動事故における判例を基に、傷害保険の適用条件や落とし穴について学んだ。講義の最後には、用意された事故シナリオを基に、事故を起こした施設職員役と記者役に分かれ、模擬記者会見の演習を行った。演習は本番さながらの緊張感で行われ、職員役は記者役に用意された想定外の質問で苦慮する様子が見られた。演習後は参加者相互で意見交換を行った。

「自然体験活動の指導」では、事業遂行に必要な「指導体制(組織編成)」について理解するとともに、指導体制の「整備」について学んだ。はじめに事業における組織体制について講義が行われ、その後、参加者は自らの組織体制について、シートを用いてふりかえるワークを行った。シートの項目には「活動に応じた指導者数や質の高いスタッフ配置の有無」「スタッフトレーニングの有無および内容」「活動中におけるスタッフの共通理解の方法」「各スタッフの役割分担の有無」等多岐に渡り、参加者は自組織の現状を洗い出していた。その後各グループで情報共有と意見交換を行い、課題に対する対応方法についてグループで考え全体に発表した。

「自然体験活動の企画・運営」では、はじめに企画の立て方および留意点、運営に必要な観点、広報計画、評価方法について講義が行われた。企画についてのポイントとして、①プログラムやアクティビティは目的達成のための「手段」であること②目的を達成できる企画であるか③目的を達成できるスキルがあるか④ねらいは明確であるか⑤参加者に適したねらいか⑥年齢や成長段階等を考慮し、参加者に必要とされる内容であるか、等の説明が行われた。またコーディネーターに必要なスキルとして、スタッフを支援・管理・教育するスーパービジョン(スーパーバイズ)についても説明が行われた。運営のポイントについては、①目的・目標・ねらいが全スタッフに共有されているか②リスクマネジメントが明確かつ共有されているか③目的目標を達成できるスタッフ体制が整っているか④効果的な広報手段や広報のタイミング⑤人・物・金の管理は適切か、等について説明が行われた。広報については、公立施設、民間事業者それぞれが行う広報にフォーカスをあて、説明が行われた。評価については、事後アンケート評価や、事前・事後の変容評価、選定された評価者による評価等の方法や、評価のプロセスについての講義があった。参加者は今まで自組織で実施してきた取組、不足していた点を見つめ直し、学び直す機会となっていた。





< 4 日 目 >

前日に引き続き、井上氏による「自然体験活動の企画・運営」が行われた。前日は講義形式であったが、4日目はグループでの演習が終日行われた。まず企画演習を始める前の練習として、講師より学校団体からの企画依頼と称し、学年・人数・希望アクティビティ・気象状況・学校が求めるねらい等の条件が提示され、どのような企画を立てるかのワークが行われた。練習後は各グループに別個のシナリオ(お題)が渡され、シナリオに明示された条件を基に企画立案の演習が行われた。シナリオは小学校からの依頼や旅行会社からの依頼(募集型事業)、県教育委員会からの依頼など多岐に渡り、クライアントが求める「ねらい」や「テーマ」、予算、要望等が指定され、それに見合った最善の企画を各グループで検討した。参加者は1日目からの各講義をふりかえりながら、企画運営に必要な視点と知恵を出し合い、各グループでまとめる様子が見られた。最後の発表では、組織体制、広報方法、事前準備、安全管理体制(緊急時の連絡体制含む)、予算、評価方法など、今までに学んだ視点を全て網羅した発表が行われ、各グループともに非常に練り込まれた企画発表を行っていた。



< 5 日 目 >

最終日は、はじめに主任講師の成松係員よりNEAL資格取得後の申請についての説明が行われた。その後、5日間を通してのふりかえりを行った。参加者からは講習会を通して感じたことや、これから大切にしていきたいこと、自組織に帰って何に取り組んでいきたいかを各々発表した。ど

の参加者からも、意欲が大きく高まり、深い学びを得られた旨の感想が聞かれた。その後、認定試験が行われ、採点の結果参加者全員が合格し、講習会を終了した。



3. 事業の成果と課題

○ 参加者の感想

- ・ 今後、体験活動の指導を行っていく際の自身の立ち位置を考え直すきっかけになりました。
- ・ もっともっと講師お一人ずつに研修時間を長くっていただきたいと思う、大変充実した時間の連続でした。
- ・ 各講義の学びが次の講義につながるようになっており、各講義を受けることで前の講義の復習ができる内容であった。
- ・ 講義もそうでしたが、人と人とのつながりの大切さを実感する5日間でした。
- ・ 座学とフィールドワーク、グループワークのバランスが良かった。
- ・ 事業運営におけるプログラム構成やプログラムのつなぎ方、雰囲気作り等とても勉強になった。
- ・ 講師の方、運営面共に素晴らしかったです。

○ 事業の成果

- ・ アンケートでの事業全体の満足度評価(4段階)は、参加者全員が4の「満足」評価であった。
- ・ 昨年度と講師を変更して運営したが、講師陣や講習内容は参加者から非常に好評であった。今後も継続して講師と連携を密に行い、講義一辺倒とまらない等内容を工夫していきたい。
- ・ 運営において参加者の負担を考慮し、夜間に講義をなるべく入れず、代わりに交流の時間を多く設けることで、講師と参加者、参加者同士や室戸の職員との繋がりが得られ、自然体験活動関係者間のネットワークを広げることができた。

○ 事業の課題

- ・ 一部の講師において、事前に依頼していた内容と逸れる部分があった。講師が活動内容を計画した段階で、改めて依頼内容との整合性を確認する必要がある。
- ・ 主任講師は規定上、全体の監督・確認を行う役割があるが、当日到着した講師との打ち合わせやその他の対応等で、会場から離れる場面もあった。他の職員との運営協力体制を構築し、現場スタッフが居なくなる場面を作らないよう、参加者のケアをしていきたい。